

べてるに学ぶ-《おりていく》生き方



東京大学大学院人文社会系研究科
応用倫理教育プログラム
21世紀 COE プログラム
「生命の文化・価値をめぐる〈死生学〉の構築」





東京大学大学院人文社会系研究科

21世紀COEプログラム「生命の文化・価値をめぐる〈死生学〉の構築」



シンポジウム報告論集

べてるに学ぶ-《おりていく》生き方

2004年11月5日
東京大学医学部鉄門講堂

東京大学大学院人文社会系研究科
応用倫理教育プログラム
21世紀COEプログラム
「生命の文化・価値をめぐる〈死生学〉の構築」

刊行の辞

竹内整一

東京大学人文社会系研究科・文学部では、2002年度より21世紀 COE プログラム「生命の文化・価値をめぐる〈死生学〉の構築」プロジェクトを始めました。これは、「いのち」や「死」をめぐる諸問題について、これまでに人文学がたくわえてきた知をさらに深め、さらに異なる学問分野の知との協同のうちに、総合的な学知として新たに構築し直そうとするものです。

これまでも「死者と生者の共同体」「新しい死のかたち、変わらない死のかたち」「死の臨床と死生観」「生死をめぐる同意と決定」等々、「生と死」に焦点をあわせたシンポジウムや研究会が催されてきましたが、一方では、医療・ケア・福祉、儀礼などの現場の問題とクロスさせながら問いを広げていく試みも模索されてきました。

本プログラムの柱のひとつである「多分野交流演習」「人間の尊厳、生命の倫理を問う」もずっとそうした問いを問うてきましたが、まずは、この演習に参加されていた何人かから「べてるの家」のことが話題にされるということがありました。

鷺田清一さん、田口ランディさん、白石正明さんらが、それぞれ別の機会にかなり強い関心をもってお話されたのですが、むろんそれはたんに偶然ということではなく、それだけこうした場においては今「べてる」が抱えている問題をぬきに語れないということを示していたのだろうと思います。

そんな折りも折り、上野千鶴子さんが「多分野交流演習」にいらっしやいまして、「当事者主権」のお話のさきで「べてる」について熱く語られました。そこで、これまでの COE の模索や鷺田さんらのことをお話し

ますと、ならば、と、そんなあたりから、「べてる」シンポへの機運が一気に高まってきたように思います。

これまでにはない新しい問題提起のかたちをゆたかにもっている「べてる」自身の魅力だけでなく、それが、趣旨文にありますように「右肩上がりの道をつっぱしってきた東大」と組み合わせられるという、これまたこれまでにはなかった対局の妙の魅力もありまして、企画はだんだんと熱をおび、大きな規模のものへと発展してまいりました。

こうして、シンポジウム「べてるに学ぶ——《おりていく》生き方」は、2004年、11月5日、本郷キャンパス「医学部鉄門講堂」において開催されたわけです。

会場には、予想通り（予想以上）に定員を大幅にこえる400名以上の参加者が押しかけ、また、会場での質問やアンケート感想などにも、こうした問題に対する関心の高さがうかがわれました。また、シンポジウム終了後に行われた、「べてる」関係者と東大生とがゼミナリストとなった5つのゼミでも、それぞれ今までには見られなかった「化学反応」が起きまして、これまた予想通り（予想以上）のものとなりました。

この冊子は、「べてるに学ぶ——《おりていく》生き方」のシンポジウムの部分の記録です。臨場感を大切にする意味で、あとからの直しは最低限にとどめてあります。ご覧になって、いま、なぜ「べてる」が問われるのか、「べてる」の、他での可能性はどうありうるのか、また、東大が「べてるに学ぶ」としたら、何をどう学びうるのか、等々——さまざまに発展しうる問題の、そのほんの一端でも共有していただければさいわいです。

（たけうちせいいち／東京大学教授）

目次

刊行の辞	3
シンポジウム趣旨文	6
べてるキャッチフレーズ集	7
「べてるの家」説明文	8
パネリスト紹介	10
シンポジウム採録	13
ディスカッション	40

シンポジウム趣旨文

べてるが東大にやってくる！

東大生はべてるの人たちの対極にあるだろうか？

それとも東大生とべてるの人たちのちがいは、紙一重だろうか？

東大生がべてると出会うと、どんな化学反応が起きるだろう。

東大と東大生は、周囲の期待や高い自己評価で
右肩上がりの道をつっぱしってきた。

東大生は状況に適応する能力がとても高いが、
自分にとって何がいちばん大事かを忘れていているように見える。

他方、べてるの人たちは、この世に不適応を起こし、
人生の辛酸をなめてきた。
だが、人生の価値が、他人の評価ではられないことを知っている。
「昇っていく」生き方をやめた人たちから学ぶ、「降りていく」生き方。

いま、右肩下がりのニッポンで、
わたしたちに必要なのは、降り方のスキルかもしれない。

COE 死生学プロジェクトが贈る、
死ぬまでは生きていく人たちのための「脱力系」シンポジウム。

べてるキャッチフレーズ集

「あきらめが肝心」

「安心してさぼれる会社づくり」

「偏見・差別大歓迎、けっして糾弾いたしません」

「昆布も売るけど病気も売る」

「ありのまんま、そのまんま」

「苦勞をとりもどす」

「弱さを絆に」

「それで順調！」

「べてるはいつも問題だらけ」

「問題を解決しない」

「治さない医者をめざす」

「べてるに触れると病気が出る」

「べてるは伝染（うつ）る」

「べてるの家」 説明文



社団法人 浦河べてるの家

「浦河べてるの家」とは、精神障害をかかえた人たちの有限会社・社会福祉法人の名称。北海道浦河町で、共同住居・通所授産施設などを運営しており、事業に参加している人たちの総数は150人を超える。

1980年に回復者クラブ「どんぐりの会」の有志が教会の古い会堂を住居として借り受け発足した（「べてるの家」と名付けられたのは1984年）。後に昆布の下請け作業から自前での製造販売を開始、さらには地域での介護用品の販売に取り組み、1993年には有限会社、2002年には社会福祉法人を設立した。それぞれの代表は、回復者のメンバーが務めている。現在、年間見学者延2500人、今や過疎の町を支える“一大地場産業”となっている。



幻聴や妄想を語り合う「幻覚&妄想大会」、精神分裂病者のセルフヘルプグループ「SA」等々、世界の精神医療の最先端の試みが、ここ北海道の浦河という小さな町で既に根を下ろしていたことでも注目を集めている。1999年日本精神神経学会第1回精神医療奨励賞、2003年毎日福祉顕彰、保健文化賞を受賞。

『べてるの家の「非」援助論——そのままでいいと思えるための25章』
(医学書院 2002年)の「著者紹介」より抜粋

パネリスト 紹介

● パネリスト

早坂 潔（べてるの家代表）

河崎 寛（べてるの家爆発救援隊隊長）

渡辺 瑞穂（べてるの家メンバー）

木林 美枝子（べてるの家メンバー）

川村 敏明（浦河赤十字病院精神神経科部長）

向谷地 生良（北海道医療大学助教授、浦河赤十字病院ソーシャルワーカー）

伊藤 恵理子（浦河赤十字病院ソーシャルワーカー）

市野川 容孝（東京大学助教授）

田口 ランディ（作家）

● 司会

上野 千鶴子（東京大学教授）

シンポジウム開催概要

日時 2004年11月5日(金) 10:00～12:00

会場 東京大学医学部 鉄門講堂

主催 東京大学21世紀 COE プログラム

「生命文化・価値をめぐる〈死生学〉の構築」

べてるに学ぶ-《おりていく》生き方

シンポジウム採録

オープニング

上野千鶴子氏

上野 ようこそお越しくございました。べてるの家は全国で大変有名で、各地で人を集めていらっしゃいます。今日は会場は立ち見の出る満席で、まだまだぞくぞくエレベーターでお越しの方もいらっしゃいます。こんなに人気を集めたのは、東大とべてるという、思いがけない組み合わせが関心を呼んだのではないのでしょうか。東大とべてる、この異質な組み合わせから、どんな化学反応が起きるか、どうぞお楽しみにしてください。私は今日司会を務めます、上野千鶴子です。どうぞよろしく。(拍手)今日は北海道の浦河から、べてるの民族大移動と言っていいぐらい、大量にオールスターズがお越しくございました。段の上に座っていらっしゃる方たちだけではなくて、会場にもたくさんのべてるの関係者が来ていらっしゃいます。浦河はもぬけの殻ではないかというぐらい、大変豪華なシンポジウムになりました。で、べてるってなーに？ これを一口で説明するのはものすごく難しいんですね。それで、まず最初に、「べてるってなーに？」ということと、とてもわかりやすいやり方で説明していただくようお願いしました。ここにいらっしゃる向谷地生良さんと木林さんが報告してくださるそうです。最初によろしく申し上げます。



向谷地生良氏

向谷地 皆さん、こんにちは。ただいまご紹介いただきました、浦河赤十字病院のソーシャルワーカーと、札幌の大学で出稼ぎの教員をやっております向谷地と申します。よろしくお願いします。今日はまず、はじめにべてるの紹介をして欲しいということですが、私が皆さんに浦河の紹介をする前に、実はべてるの宴会副部長である木林さんがいつもお客さんを歓迎するときの歌をもって今日のオープニングに代えたらいいんじゃないかと、思い付いて、フロアにいた木林さんに声をかけました。木林さんには、行く所々で替え歌のご当地ソングを自分で即興で作ってしまうというものすごい才能がありまして、歓迎の歌の東大版を作ったそうですから、それでもってまずオープニングに代えていただきたいと思います。では木林さん、よろしくお願いします。

木林 はい。あの、“迎”能プロダクションってべてるにあるんですよね。そこで部長さんが66歳で今日来られなかったんですが、私は48歳で副部長をしています。主に私が替え歌を作って、部長さんと部下の人たちと3人くらいでべてるに来るお客さんの前で接待のために歌っています。今日はズンドコ節の替え歌を歌いたいと思います。皆さん、イチニノサンと言って下さい。

観客 イチニノサン



木林美枝子氏

木林 ただいま参りました私たち（パパヤ） 東大の皆さんこんにちは
 どんなことがわかってても決してビックリしないでね
 いやじゃありませんか分裂病 幻聴幻覚妄想で
 居ても立ってもいられずに 自分の体に傷付ける
 ズンズンズンドコ（東大！）
 いやじゃありませんか不眠症 夜中ワサワサ音立てて
 家族の皆に世話かけて 周りはみんな寝不足だ
 ズンズンズンドコ（みえちゃん！）
 いやじゃありませんかアル中は 朝に昼に夜まで
 一日中飲んだくれ おまけにお店につけつくる
 ズンズンズンドコ（東大！）
 いいじゃありませんか精神病（パパヤ） 神からもらった宝物
 普通の人とは違っても みんな立派な病気持ち

ありがとうございました。（拍手）

べてるは約束のできないところ

上野 すばらしいオープニングでした。一気にべてるの世界に引き込まれましたね。今日はこちらの段に座っていらっしゃる方たちにはギャラが出てるんですが、木林タレントさんにはギャラが出ませんのに、本当にありがとうございました（笑）。（向谷地氏に）では、よろしくお願いします。

向谷地 ということで、オープニングを飾っていただきました。今、スライドで見ていただいている北海道は、今日本で一番経済的に沈没した地域でありますけども、その北海道の中でもさらに沈没しているのが、私たちがやってきた日高という浦河のある地域でありまして、その中でさらに沈没した群れが、精神障害をかかえる当事者でした。そういう地域的には厳しい中で、早坂潔さんたちが地域のために昆布の産直を始め、今日まで25年間活動して参ったということです。今は、曲りなりにも社会福祉法人となりまして、この統合失調症を抱えた清水里香さんですとか（スライド参照）、そういうメンバーたちが施設長や理事長になって、非常に危うい社会福祉法人の経営をしております。その意味では、最先端の福祉経営を浦河で実験している最中です。今、潔さんから始まって二十数年経ちまして、このような形でべてるの各部門がそれぞれ色んな事業に取り組むという事業体になってきています。これで紹介を終わります。どうもありがとうございました。（拍手）

上野 今日、段の上に座っていらっしゃる方たちは、べてるの家の当事者の方たちと、浦河日赤の医療スタッフの方たちです。ネームプレートに肩書きが書いてありませんが、めだかの学校の歌のように、誰が生徒か先生か、ちょっと見には誰がスタッフか誰が当事者かよくわからない。向谷地さんっていう人も相当危なそうなお顔をしてらっしゃいますし、それから東大側の参加者もいらっしゃるんですが、誰が東大側の出席者かもよくわからないように並んでいただきました。これからお一人お一人、自己紹介を兼ねながら発言していただきたいと思うんですけども、皆さん方のお手元にあるチラシを見ていただければ大体名前とお顔が一致するかと思います。で、やっぱりこういうときの皮切りは「ミスター べてる」こと、潔どん。あなたが主役だ。あなたがいないと始まらない。

というわけで、早坂潔さん。「潔の潔は不潔の潔」っていうんですけど、べてるの名物男、べてるの歴史と同じ長さになたってべてると一緒に歩んできた、「生きたべてるの歴史」と言われる人です。早坂さんから「千鶴ちゃん、東大に呼んでくれんか」って言われたのよね。ごめんね、安田講堂じゃなくって。安田講堂にしようかと思ったんだけど、ちょっと大きすぎてね。でもここは医学部の新築の講堂でね。金持ってるってことがすごくよくわかるでしょ（笑）。潔どん、東大に来た気分は？



早坂潔氏

早坂 最高だね。

上野 どんなふうに？

早坂 あの僕は早坂潔です。東京駅に着いて、正門をくぐるって言うからどういう正門なのかなと思ったら、工事をしていて、ここだと思わなかったんだ。東大っていうと立派なところかなと、中身は立派なんだけど、あの、びっくりしました。みんな東大生かなと思ってパンフレットを見たらね、これ言っているのかな、偏差値ってなんだかなって思っている。皆利口そうな顔をしてても頭の中身は皆同じだなと。どういう差があるのかなと。僕たち軍団がやって来ましたので、今日はよろしくお願いします。（拍手）

上野 最初から潔節をかまされました。イエーイ、みんな、東大生かい？ ちょっと東大生は手を挙げて。半分ぐらいでしょうか。東大生じゃない人も結構いっぱい来ていらっしゃいます。東大生って頭の中は皆同じ？

早坂 僕は、上野千鶴ちゃんが学生に講演をしたMDを聞きました。そしたらわけのわからないことを言っていた人もいました。低いところに掘っていけば宝物があるんでないか、という言い方をしていた学生がいたんですけども、そうやって考えればそうです。でもね、掘っていけば掘っていくほど価値があるんじゃないかなと。低さと高さじゃなくて、掘っていくことに意味があるんじゃないかと僕は思いました。今日はね、べてると東大のガチンコだけ……、はあ。今日はありがとう。

向谷地 皆さんこれはね、潔さんのニコチンが切れてきてる兆候です（笑）。

上野 そのようです。べてるについてもっと詳しく知りたい方は、べてる本と言われる本が今4冊くらい出ております。どうぞ手に入れてお読み下さい。今日のシンポジウムのタイトルの「降りていく生き方」っていうのは、その中のひとつ、横川和夫さんの本のタイトルからいただきました。「降りていく」ということですが、「降りていく過程が大切だ」と潔どんは言いたいのか？ どこまで降りました？

早坂 降りていくということ……。

上野 今日は鉄門講堂のある14階までエレベーターで上がってきたわけですが、ここにいる東大生たちは昇っていった人たちなんだろうか？

早坂 いや、降りてってる人だべ、きっと。ここは降りてる人じゃないの。今は東大という高いところにいるけども、昔は低かったよ、きっと。

上野 今日は、東大生とは誰かってことがテーマじゃないんで、べてるってなーにという話をしてもらいましょう。

早坂 うん、あのね、べてるは約束のできないところだね。

上野 今日は、約束通り来てくれて本当にありがとう。

早坂 「(上野氏の口真似で) どうもありがとう。」あの一、僕一人の講演になっちゃって（笑）。誰も助けてくれないのがべてるだからなあ（笑）。僕は、アッパラーパーになってね。べてるの人だったら助けないで日赤病院に連れて行くんだけど、無責任体制です。無責任だけど情はあります。

治さない治せない川村先生も愛情があるし、相談しないさせないソーシャルワーカーもいるけども（笑）。俺の講演になってしまってるじゃない。

上野 今の話を聞いてると、べてるってところはとっても居心地の良さそうなところに聞こえるけど、ほんとにそう？

早坂 うん。僕はね、生活保護と年金と、それだけで食べてんだ。

上野 そっか。そんなに居心地のいいべてるって、よそと比べてどこがいいと思います？

早坂 よそと比べたら？ よそのどこ？ 東大で？ 東大はそれなりに賢い人はいるけども、それなりにまあ色々色があっていいんじゃないの。まあ、ぼくはまだ東大生と話してないけどさあ、顔ぶれ見たら、きれいな人ばかりいるんだわ（笑）。だけど、本当に腹を割って話すと、いい人たちがいっぱいいるんじゃないかと思います。

べてるの仕掛け人

上野 はい。腹を割ってしゃべりたいと思います。べてるはよそと比べてどこがいいんだろうって、私はずっと考えてきたんですが、この質問を潔どんにするのは適当でないということがわかりました。だって潔どん、よそ知らないもんね。本当は、今日はもう一人、坂本愛さんというべてるの新星、被虐待児のスターをお呼びしてたんですが、その方はいらっやいませんでした。この方はいろんなところを出たり入ったりした脱走の名手なんですけど、いろんな施設を転々としてべてるにいらした。べてるがよそと比べてどこがいいかっていうことを、本当によく心からわかっていらっしゃる方ですが、残念ながらその方に話していただけません。潔どんの隣にべてるの裏も表も含めた仕掛け人、べてるの顔ともいえる、べてるを作り出したご当人の向谷地生良さんがいらっやいます。本当に人生をまるごとべてるに入れ込んだような向谷地さんです。べてるは誕生してから25年経ちますが、こんなに続いてきて、こんなに大きくなって、こんなに全国区的に評判になって、こんなに各地でひっぱりだこになって、そして今日はこれだけの人が東大に集まった。どういう感慨をお持ちになりますか？

向谷地 ちょうど東大の門をくぐった時、今日は何を話そうかと考えて

いました。降りていくというテーマでしたけど、私たちが東大に足を踏み込んだということは、これは究極の落ち方をしたのかなと（笑）。歩きながらふと浮かんだのがそういう感覚だったんですね。

上野 向谷地さん、もっと落ちる落ち方があります。勲章をもらうということです（笑）。

向谷地 そうですね、ちょっと狙いましょうかね。こうやって私自身が襟裳岬の近くの浦河という町に降り立ったとき、落ちぶれた感覚を感じました。そういう感覚で浦河の町に暮らし始めたのですが、この落ちぶれた感覚は何だろう？ という興味がありました。それから、潔さんたちと出会ったときに感じたのは、私たちはある種の秩序とか、規則とか、人との調和ということ意識しながら生活することが世の中の平和や安心をもたらすとある程度考えるわけですけども、それがすべてが打ち壊されていく世界。そういう秩序が自分の中でどんどん壊れていく感覚というのが、潔さんたちと一緒にやってきた中で自分が出会った感覚ですね。ソーシャルワーカーというのは、福祉の立場で人から相談を受ける立場ですけども、相談を受けるという立場よりむしろ相談することが積極的な自分の役割に見えてきた。川村先生のように、精神科医を極めていったら「治さない治せない医者」というようなところまで極めていくかのような、そういうある種の落ち方みたいなもの。潔さんに徹底して壊された。最初に出会ったときには、とにかく腹が立ってしょうがなかった。私は比較的温厚な人間で、治療に当たっていた。それが潔さんの顔を見るとイライラして腹が立つ。

早坂 それは病気だわ（笑）。

向谷地 このじれったさというのが、私たちの秩序を壊していく。私たちが相談したり、援助したり、彼に対して関わる結果として、全然期待した成果を私たちにもたらしてくれない。そういう人として潔さんは常にある、というか。これが今も全然変わらないというのはすごいですね。潔さん、ね。

早坂 俺は、無意識にそうしているわけではない。無意識ではないと思う。

上野 わざとやってるんですか？

早坂 いや、無意識だな（笑）。あの、僕ってね、最初向谷地さんと会ったときにはいい人だなと思っていたけど、そのうちに、だんだん腹が

立ってくんの。最近僕考えたんだけど、腹が立つのは相手じゃなくて自分だなんていうこと。幸せとか、楽しいこととか、悲しいこととか感じるのは自分自身なんだなということ、べてるにいて20年かけて知りました。べてると出会って、僕の中で何が居心地良くなったかという、今でも病気をしてるということ。僕の病気は、固まる病気なんだけども、川村先生は全然治さないんだけど生かしてくれる。僕はこのままだと、日赤病院かどっかの精神科に入ると一生出られません。それが日赤病院に入って川村先生と出会って、川村先生は「半分治したから、あとの半分はべてるで治すんだぞ」って言ったんです。僕はあるときこう思いました。川村先生は、一人の人間としてこの世の中というか、浦河の町に出してくれるのかなと思いました。こういう先生はめったにいません。

上野 どうしたの、潔さん。今日は川村先生にすごい大サービスしてる。

川村 終わった後で何かおごって貰おうと思ってるんだよ（笑）。



川村敏明氏

自分の病気には逆らえない

上野 いつもと違うよね？ では、一通り皆さんに話していただきま

しょう。では次に、河崎君。河崎君にぜひ来てもらいたいと思ったのは、私あなたに最初に会った時がすごく印象的だったんです。一番最初に私に「司法試験って」っていう話をしたの、覚えてます？

河崎 忘れました。

上野 忘れました(笑)? その時、河崎君は学校とか試験とかに何か思い入れがあるのかな、という印象を持ちました。前に一度、私の東大の研究室に訪ねてくださいましたよね。



河崎寛氏

河崎 はい。

上野 今日ここに来てみて、感想はいかがですか？

河崎 感想は、あの、緊張してます(笑)。

上野 河崎君は、べてるの名物である「幻覚妄想大会」の最優秀新人賞受賞者なんですよ。

河崎 はい、そうです。

上野 どういう理由で新人賞を受けたんだと思います？

河崎 僕は分裂病なんですけど、子どものときから爆発系っていう——向谷地さんやべてるの人たちはそう呼んでいるんですけど——暴力を振るったりとか、物を壊したりとかっていう、いわゆるキレル病気です。

……すみません、ちょっと質問が頭から飛んじゃいました。

上野 今、向谷地さんがスライドを出して下さってるんですが、河崎さんは当事者研究というものすごく面白いことをやってるんですよね。

河崎 はい。

上野 どんなことをやってるか、ちょっと話してくださいますか？

河崎 べてるには、分裂病をはじめ、色んな病気を持った方がいるんですけど、その仲間たちや専門家の方を交えて病気のことを語ったりとか、自分の病気の体験を仲間たちと一緒に探り合って、病気って楽しいねとか、病気って一緒に皆で語り合えば楽しく生きられるんだねとか、自分たちが病気を持って社会やべてるという外の世界で楽しく暮らせるんだということを研究しあっています。

上野 河崎君、当事者研究をやってみて、何かわかったことがあります？何が良かったですか？

河崎 当事者研究をしてみて、自分の病気には逆らえないなということがわかりました。研究をして良かったのは、それまでは必死に病気を克服しようとか支配しようとかしていたんですけど、自分一人であがいてるんじゃなくて、仲間と一緒に語り合ったりとか、ソーシャルワーカーとかお医者さんとかと話をしたりとか、そういう周りの人が病気の世界を道案内してくれることです。そういう道案内をすることが当事者研究だと思います。

身一つでも何とかなる

上野 べてる名言集っていうのがいっぱいあるんですけど、今日も出ましたね。おっしゃることが本当に深いですね。当事者研究をやって病気を克服するとおっしゃるのかと思ったら、「自分の病気には逆らえない」、「病気の世界の道案内をする」と。名言がまた一つ増えましたね。

もう一人、当事者研究のスターがいらっしゃいます。こちらの渡辺瑞穂さんなんですが、「食べ吐きのプリンセス」。この方の当事者研究を読んで、自己分析のあまりの鮮やかさに私は驚嘆しました。ここまで鮮やかな自己分析をやってみても、それでも治らないものかと思ったりしたんですが、なるほど病気は治すもんじゃないんだということが今ではわ

かりました。瑞穂ちゃんは、私と出会ったとき、声が出ない失声症というご病気でしたか。



渡辺瑞穂氏

渡辺 はい、そうです。

上野 私ね、瑞穂ちゃんの声을今日初めて聞いたんです。どんなに来てもらいたかったか。これは皇后陛下と同じ病気です（笑）。瑞穂ちゃん、当事者研究やってみてどうでしたか？

渡辺 上野さんが、摂食の研究に関してすごく良かったと言って下さってるのは耳にしていたんですが、あれは私の研究というよりも、摂食というものをキーワードに皆で問題を持ち寄って作ったような共同作です。だから、それだけ色んな見方のできた内容になったと思います。私にとって当事者研究というのは、それこそ治そうと思って始めたわけではないんです。というのは、ごく幼いころから自分の中身に関して研究をして、今自分はどういう立場をとるべきなのかとか、どういう行動をするべきなのかっていうことを、いちいち本能的に吟味しながらやってきていたので、どうしてそういう摂食になったのかと考えて分析するのはもうすでにひと通り終わっていたんですね。分析すれば回復につながるのかと思って、その時出ていた専門書なども目を通したりしたんですけ

ども、「中身はわかった」と。「でも、それで？」ということになってしまいまして。結局、摂食することが何のために必要なのか、摂食することで自分が得られるものは何なのかという方に視点が行くようになりました。それで、ちょうど分析が終わってしまっていて行き詰っているときに、ほかのことも色々重なって声が出なくなりまして。で、たまたま浦河につながることで、そこで当事者研究ということがちょうど出始めたときでしたので、面白いなと思って。それまでは自分自身だけの見方でものを見ていたのが、症状は違っても根本的に同じような行き詰まり感を抱えたメンバーたちと、症状は違うけれどもどこか同じテーマの話をするすることで、こういう見方があるんだというのを色々得られた気がします。だから病気に対して、私には皆で話したからどうだとか、一人じゃなかったから安心するとかいう感覚はなかったんですけども、でも自分自身でまず考えたベースがあって、その上にいろんな人の見方が重ねられて、それぞれの欠点とか足りない点を補うことができたのかなと思います。

上野 当事者研究をやってみて、何か瑞穂ちゃんが変わることはありましたか？

渡辺 正直言いまして、病気そのものに関して直接的に何かが大きく変わったというのはありません。ただ、メンバーの人たちと一緒に病気の話をするうちに年月が経っていった、その間に色んな研究をしたり練習をするために浦河に来たはずが、順調に完全に引きこもり状態になっていくことを何回も重ねたりしました。でも、その合間合間に研究をしたり、仲間たちの言葉を聞いたりという風に、何ていうんでしょうね、信じるというか、ゆだねるとするか。そういう言葉でいうとやはり仰々しくなるのであんまり言いたくないんですけど、最初浦河に来たときに、向谷地さんがよく「信じてしまえ」、「根拠はないけど、とにかく信じてしまえ」みたいなことを言われまして。そんなのは絶対無理だと思っていたんですけども、徐々に型枠にはめた生き方というか、社会で普通通用しているような、課題をこなしてそこに付加価値を求めて自分の評価を付けるというやり方じゃなくても、身一つでも何とかできるのかなという気がだんだんしてきています。ただ、まだ全然行動には現れていないので、たぶん周りにはご迷惑をお掛けしていますけれども。

メンバーに支えられて働く

上野 名言が次々出ますね。「身一つでも何とかなる」と言われるとズシンと来ます。この瑞穂ちゃんのクールさ、本当にしびれますね。「自己分析は終わった。中身はわかった。で、それで？」って言われると、私はズキンとききました。私たちがやっている学問のことを言われたのかと思ったものですから。もう一人女性がいらっしゃいます。伊藤恵理子さんです。当事者ではありません。浦河日赤のソーシャルワーカーで、お母さんに成り立てですね。病院でのお立場は向谷地さんが“とらばーゆ”（転職）なさった後任だとお聞きしましたが、そのお立場から来る重圧をお感じになりましたか？ それから、浦河に来てカルチャーショックを受けられましたか？



伊藤恵理子氏

伊藤 向谷地さんが病院を離れることになって、一番動揺したのは私だったんじゃないかなと思います。でも、どうしたらいいんだろう、と思っているうちに妊娠しまして。私は全然後任の役割を果たさず産休育休に入ってしまった、あとは本当に新人のワーカーが今何とか切り盛りしているという状況なんです。当時は、向谷地さんがずっと25年間浦

河で築いてきたことを、一体私がどうしていったらいいんだろうということ
ことで途方に暮れている時期はあったんですけど、その時思い出した言
葉があるんです。私が浦河日赤に就職したてのときに、まだ新人で何を
していいかわからないのに、向谷地さんは何一つこれをして欲しいとか、
指導してくれないんですね。それまで私は人に期待されることにどう応
えるかということに結構一生懸命になってきた人生を歩んできた部分も
あったので、何をしたいのか、何を期待されているのかわからない状
態に非常に困ってしまって、3ヶ月くらい経ったときに向谷地さんに居
たたまれず聞いたんですね。「向谷地さんは私に何を期待してるんです
か」と。「ここの相談室で、私にどういう役割を果たすことを期待されて
いるんですか」と向谷地さんに聞いたら、「あ、何も期待してません」と
言われて。で、ガクッつと。私は初め、「ああ、何も期待されてないの
か」と、「私はそんなに価値のない人間か」というようないじけモードも
あったんですけど、よくよく考えてみると、私ができる範囲で、私はそ
のまんまでいいんだよというメッセージだったのかなということ、向
谷地さんが去っていくときに思い出しました。それで、私はみんなの力
を借りていけばいいんだなと思うようになりました。現在は、自分一人
で頑張って何とかしようというより、メンバーの力を借りてやっている
毎日です。メンバーたちがとっても力を付けて、当事者研究なども自分
たちでやれるようなスタイルになってきてるので、ソーシャルワーカー
が頑張るとか、専門家が頑張るといような雰囲気ではなく、メンバー
たちに私たちの方が支えられて働いているというような、そんな感じ
です。

上野 浦河のスタッフの人たちは、本当に「生活まるごとべてる」みた
いで、ほとんどプライバシーがないような生活をしておられますが、今
度も赤ちゃんとご一緒ですよ。浦河で生んで育てるってどんな気分
ですか？

伊藤 浦河は、とっても安心して子育てをできる場所じゃないかと思っ
ています。お母さんやお父さんが一人で頑張るんじゃないくって、いろ
んな人に相談していいんだよとか、いろんな人の力を借りていいんだよ
ということで、地域ぐるみでお母さんたちを支えていこうという雰囲気
です。べてるを含めて、地域で研究している所なので、私もひとりで頑張

らなくていいかなと、安心した気分で浦河で子育てできるかなと思っています。

上野 もしかして、妊娠されたのもその安心があったからですか？

伊藤 さあ、そうでしょうかね。今少子高齢化ですけど、浦河は多子高齢化といって、赤ちゃんがどんどん生まれています。それも多分、安定した空気があるからかなあというところは感じてます。

楽しむ力

上野 だそうです。次にいよいよ、べてるのゴッドファーザー、「治さない治せない医者」で有名な川村さんにご登場いただきます。浦河日赤精神科のお医者さんでいらっしゃいます。私の知ってる精神科の医者が、「1日患者と二人でじっと座ってるのが自分の仕事だ。僕は何もしない。じーっと一緒に座ってて、患者さんと僕の違いは、僕に給料が発生していることだけだ。」とおっしゃるんですが、それでお給料もらっていいんですか、とか思っちゃうんですけど（笑）。べてるの医者であるには、なにか特別な性格が要るものですか？

川村 まず、私今日ここにきた感想からお話させていただきます。

上野 そうですね。それからお聞きしなきゃいけなかった。何しろこの場所は東大医学部ですからね。

川村 ええ、東大に来了という事実をまず受け入れたいなと思います（笑）。東大に行くことになったという話を聞いてから、この1年くらいを振り返ってみると、浦河の統合失調症の人がちょうど1年くらい前に皇居に招かれて両陛下とお話をしてきた。その年にジュネーブの国連で発表をしてきた人がいて、今回東大で。非常に印象的な出来事だけでもこの1年の中に起きてるんですが、以前だったらこういうことがあれば、必ず薬が2割か3割増えるか入院だっただろうなと思います。「トウダイ」に行くっていうのは、我々のところでは襟裳灯台（笑）。今回も「東大に行ってきました」といっても、地元の人にどれくらい信じてもらえるのか。我々自身が妄想化したんじゃないかと思われることを、非常に危惧しています（笑）。このことを楽しむしかないな、と思います。私は、何がやっぱりうれしいかというと、べてるのメンバーといわれる人たち

がこういう場、ステージに上がっているというですね。これは20数年前にはまったく考えようもなかった。それが現実になっているということが非常にうれしいなと。私が20数年前に初めて研修医として浦河に来たとき、当時から向谷地さんがいたわけですが、向谷地さんとの出会いが僕には衝撃的でした。当時、我々の精神科の世界の中は、浦河の今の現実とは相当違っていました。やはり医者が存在が高いところにあって、治療という名の権威的な状況がごく当たり前という状況の中にいながら、患者さんは皆、たいていの相談ごととはソーシャルワーカーのところに行って、医者のところでは何も相談しない、という現実がありました。私はそういう中で、医者とは何をする存在なんだろう、私には何ができるのだろう、ということを真剣に考えざるを得なかったんです。そのころ早坂潔さんとも出会って、「私に何を治せというのか」という、まさに無力を味わわされる場面が多々ありました。そういう状況で、今言いましたように、医者が何をすべきかということと、何をしちゃいけないのかということを感じていました。浦河という地で生まれ、精神病になった、というこの事実にどういう答えを皆で見つけられるんだろうかと。あらゆることがチャレンジでした。ソーシャルワーカーの向谷地君の「精神障害者には当事者性がない、みえない」という言葉は、私に強く印象として残った言葉です。彼のところに相談に行っても何も特別解決しようとしな。むしろ悩みごとを手伝って、だんだん自分の言葉で自分の悩みを語る人たちが増えていく。そういう様子から、単純に症状を取るとか治すとかいうこと以上に大事なものが私に伝わってきました。私は、最初は研修を1年で終えて大学病院に戻る予定だったのですが、何か1年で帰れなくて、もう1年延長してもらって2年いました。その2年間で、私自身が浦河でどんな医者として生きていくかということの基礎を植えつけられた気がします。皆で一緒に問題を考えていくというスタイル。そういう姿勢の中で生まれてくるのが、私の中でも非常に手ごたえのあるものだなという風に感じていました。今、浦河で精神科医をやるのは大変だと思います。研修で来る若い先生方は大変だなと思います。メンバーから「先生も病気なんだから。あんまり無理すんな。みんなおかしいんだから。」といわれる中で精神科医をやらなきゃならないのは、かなりしんどいなと思います（笑）。

上野 べてるは川村さんのキャラで持っているというところもあるような気がします。川村さんのいないべてるを考えるのはなかなか難しいと思いますが、もしべてるにほかの精神科医の方がいらっしゃるとしたら、その方に必要な条件って何でしょうか。

川村 僕は、楽しむ力じゃないかなと思います。このままの中から何か楽しむことを見つける力。やっぱり精神科というのは、どうしてもネガティブあるいはマイナスにしか見えないような状況に常にありますので、早坂さんたちが相談室に行ってて笑顔や笑い声がいっぱいあること自体が私には非常に衝撃的だった。医者の中で起きないことがどうしてここで起きるんだろうと。その状況を楽しむか、ショックを受ける医者になってしまうかの差は大きいだろうなと思います。

無力感と罪悪感

上野 なるほど。べてるの名言集に次々言葉が付け加わります。「医者には楽しむ力が必要だ。」そういわれたら、苦しんで医学部に入っちゃった人はもう「楽しむ力」を失っているかもしれませんね。最初に東大へ来た感慨を言っていました。べてるは皇居に呼ばれ、国連に行き、東大に来て、それから今日は朝日新聞とNHKが取材に入っています。あと残りは、やっぱり勲章くらいですかね？ べてるの関係者の方たちがこれだけ東大に来て下さるんだから、東大からも誰か発言者を出して話してもらおうと知恵を絞りました。このシンポジウムは、COE 死生学プロジェクトの一部としてやっているのですが、その中の応用倫理学のセミナーの常連でいらっしゃる田口ランディさんにお声をお掛けしましたら、喜んで来ていただけました。インターネットで売り出した、IT作家の女王、引きこもり青年たちのアイドルです。ランディさんがべてるに興味を持ったのはどうしてですか？

田口 私がべてるの家に興味を持ったのは、私の家族の問題に尽きると思います。べてるでいうところの爆発型といわれる大変キレやすい家族を2人抱えておりまして、幼少のころから大変苦労しておりました。そのうち兄は引きこもりの末に自殺し、今はもう亡くなっています。やはり兄の自殺は大変ショックで、家族して大変無力感と罪悪感を持っていま



田口ランディ氏

して、どうしたら、どういう風に生きたら彼は死なずに済んだんだろうかということをずっと探していました。そういう中でべてるという場所を知って、どんなところなのか知ってみたい、見てみたいと思ったのが最初のきっかけです。

上野 今日の話をずっと聞いてこられて、どういうご感想ですか。

田口 今日の話というか、べてるの方たちとお会いするといつもそうなんですけれども、私は非常に苦しくなってしまう。というのは、兄や父が大変キレやすい爆発しやすい人たちで、私はまったく理解できずわけがわからず子どものころから一緒に暮らしてきました。兄の死んだ理由すら未だによくわからないんですが、はっきりと私が今言えることは、私は兄を不幸だと思っていました。あの人が今後生きていっても、まともにならなければ幸せになれるはずはないという確信を確かに当時持っておりまして、それを思い出すんですね、皆さんに会うと。なぜ幸せに生きる彼のことをイメージできなかったんだろうかと。

上野 ランディさんの話を聞いてると、兄が父がとおっしゃるので、ランディさんご本人のことではありませんよね。そうするとお立場としては、患者さんの家族というお立場ですか。

田口 気持ちとして、いつも家族当事者の気持ちになってしまう。

上野 そうですか。私はランディさんの作品を読んで、この人が当事者研究を始めたらどうなるだろうということにとっても興味があるんですけど。

田口 私の書くエッセイは、ほとんど当事者研究だと思います。私自身ははっきり言って、何かやりたい病です。何かしてあげたい病、してあげなければいけないと思っている病、自分が何かしてあげたら人は幸せになれるのではないか、あるいは自分のせいで人は不幸になってしまったのではないかという妄想を持っていると思います。

上野 潔さん。今じっと聞いてたよね。こういう人に何ていってあげる？

早坂 病気型……いや、回復型……いや、病気型のコミュニケーション障害だな。

上野 診断名が付きました。何かしてあげたい病、何か起きたら自分に責任があると感じる病なんでしょうか。

早坂 いや、それは違うわ。何かしてあげたい型は病気型だな、やっぱりな。自分が満足できないから、してあげるんだわ。

上野 他 ほお。

早坂 おー、いいところ来たな、おい（笑）。東大の皆様、来ましたよ！

上野 ランディさん、診断が出ましたが。

田口 やだあ。

べてると東京大学医学部精神科をつなぐ

上野 ここに座っている東大という組織に所属している人間は、私のほかにはあとお一人、市野川容孝さんです。医療社会学の専門家でいらっしゃるんですが、この方は生え抜きの東大生で、現在、東京大学で助教授として教えていらっしゃる、ザ・東大と言ってもいい。東大の生産物でもあり、かつ現在生産者でもいらっしゃいます。もちろん市野川さんが東大を肩に背負ってお話になる必要はありませんが、べてるがご専門に非常に近いので、ぜひとお招きしたらご快諾いただきまして、ありがとうございます。最初に、ずっと今まで聞いてきたやり取りのご感想を一言お聞かせいただけますか。



市野川容孝氏

市野川 感想ということで言えば、べてるは本でしか知らなかったもので、これから色々勉強させてもらいたいというのが感想ですね。

早坂 一回べてるにおいて。

市野川 はい(笑)。それから、さっき田口さんがおっしゃっていたことと少し関連するんですが、僕もどっちかというと何かしてあげなきゃいけない病の方に近いかなという気がするんですね。たぶん、上野さんが「お前は東大しか知らないだろう」みたいな意地悪なことを絶対言うだろうなと思って、今日は少しそのことについて考えてきました。さっき上野さんが意地悪くおっしゃったように、私はまず大学生として東大に来て、それから、私からすると思っても見てなかったんですが、さらにここで教えるようになってもう5年以上経ちました。この本郷に僕が学生として進学してきたのは、1985年です。あの頃は、1983年に宇都宮病院事件というのがあって、それが明るみになったのが1984年。そして、裁判が始まった(詳しくは大熊一夫『新ルポ・精神病棟』朝日文庫)。僕が進学してきた1985年には、東大医学部の関係者が宇都宮病院事件に関係していたということが、学内でも問題になっていました。当時、僕は文学部の学生で、立て看なんかを出した記憶があります。だから今日、上野先生のご尽力でべてるの皆さんを呼んでいただいたんですが、一方

で東大医学部の精神科について考える必要があると思います。この大学の医学部——当時は「帝国大学医科大学」という名前でしたが——で、^{さかきはじめ}榊俣という人が、日本で初めての精神科の教授になったんですね。そういうところなんです。さきほど川村先生が「トウダイって言ったら光る灯台だ」といいましたが、「灯台下暗し」って言葉もあります。ここは14階ですが、ここを降りてほんのちょっと行ったところに東大病院があって、そこにはかつて「赤レンガ」と称されていたところがありました。医学部の関係者が宇都宮病院事件に関係したという事実もありますが、その一方で、この「赤レンガ」では、精神医療を、何とか良くしていこうとしたお医者さんたちが、活動していました。私も、この「赤レンガ」に何度か足を運んだ覚えがあります。ただ、もうその「赤レンガ」も何年か前にはなくなりました。医学部の学生さんに聞いたら、もう患者さんもいなくて、学生のチュートリアルルームなんかがあって、僕が知ってる昔の「赤レンガ」とは全然違うものになってしまったようです。だから、確かにべてるのユニークさ、聞いてても感服する面白さというのは一つありますが、私としては、べてるの試みを、この大学の医学部の精神科とどうつなぐことができるのかというのは、他ならぬこの場所で考えなければいけない問題だろうと思います。折角、北海道から、ここまではるばる来てもらっているのですから、そういう風に、私たちの足元とつなげることを考えなければいけないと思うんです。ただ、私は医学部の人間でもないし、ただの社会学をやっている人間なので、そこまで踏ん張って言うつもりも資格もないんですけど、まあそれが一点ですね。あと、もう一つしゃべってもいいですか？

上野 どうぞ。

ケアの主体は本人

市野川 1985年にここに進学してきた当時、僕は身体障害者の人たちの自立生活運動に参加していました。ご存知の方もいらっしゃるかもしれませんが、自立生活運動というのは、身体障害者が施設でもなく、家でもなく、アパートを借りて自立して暮らそうというもので、ちょうど今から20年ほど前、70年代の後半に徐々に広がっていった運動です。

私は自立生活運動に、介助者としてコミットして、今でも仕事の合間にずっとやってるんですけど、そのときのエピソードを一つだけ。上野さんは「当事者主権」ということをいいますが、私に言わせるとそんなものは20年前からそうなんであって、「何を今さら」というのが私の正直な感想。ただ、難しいのは、その「当事者主権」に、「非」当事者、私のような介助者がどうやって関わっていけるのかということです。当事者主権、つまり当事者の意見を最大限に尊重して、ということは、私なりに分かっているつもりで介助をやってきましたが、それでも、わかってなかったなーと思い至ることが一つありました。それは何かというと、僕が介助に入っている人が、2年か3年ぐらい前に「犬を飼う」と言い出したんです。大丈夫かなと思って見てたのですが、犬が入ることによって「ケアする側」である私と「ケアされる側」——この言い方は本当は間違ってるんですが——の当事者の関係が変わったというか、あらためて違ったように捉え直すことができたんですね、私なりに。それはどういうことかということ、犬を飼うようになって、私が介助に入っている人は、それまで使っていなかった電動車椅子を使うようになって、自分で犬の散歩を電動車椅子を使ってするようになったんです。それまでは私が車椅子を手で押していたんですけど、そういうことをしなくてよくなった。じゃあ何をするかということ、私は電動車椅子と犬の後ろをトボトボ歩いて、ウンチを拾ってるわけですよ。ただ、その時、僕はハッと気が付いたんです。つまり、僕は今まで「ケアする」「ケアされる」という受動－能動の関係でしか、介助というものをやっぱり考えてなかったんですね。でも、犬が入ることによって、僕がケアしていると思っている人が犬をケアしている。本人に気遣う、ケアする能力があったのですが、僕にはそれがちゃんと見えていなかったんですね。つまり、その人は犬をケアしてるけど、それだけじゃなくて、本当はそれまで自分自身のことを気遣っている、ケアの主体だったんです。私たちは本来、その人のケアする力っていうのかな、自分を気遣う力、生きる力を本当はアシストするだけの存在に過ぎないんだけど、やっぱり「何とかしてあげないといけない病」というのか、そういうケアしようという心がどうしようもなく染み付いてることがわかった。犬が入って、その人が散歩をする、犬をケアするっていう営みが初めて僕に見えたときに、その人

本人のケアする能力、ケアする力というのを、今さらながらに再確認した。

さきほど「治さない医者さん」という話がありましたが、何とかしてあげなきゃいけない病というのがあるとしても、本人の持っているケアする力をちゃんと見た上で、そこを出発点にして考えなきゃいけないのかなということが最近自分の身近であったことです。すみません、長くなって。

上野 ……潔どん、この人は何て病気？

早坂 「自分に厄介病」だね。自分をどうしていいかわからない病(爆笑)。

市野川 仰るとおりだと思います(笑)。

上野 インテリがしゃべるとやっかいモードになっちゃうんです。べてるに会うと病気が出ると言われていますが、どの人も自分のことを話し出すというモードになるようです。ところで、べてるは当事者主体といわれていますが、私も『当事者主権』(中西正司と共著、岩波新書 2003年)という本を書きました。市野川さんは20年前からそうやってきたとおっしゃいました。簡単に言うと、「患者さんが主人公」ということです。私ね、同業者として「ただの社会学者」とおっしゃった市野川さんにどうしても聞きたいことがある。医療に関係している人の研究をやるのが医療社会学というものですが、会場に医療関係者の方はどのくらいいらっしゃる？ 東大医学部の関係者の方はいらっしゃるでしょうか？ あんまりいらっしゃらないようですね。場所柄もうちょっというらっしゃるかと思いましたが。ところで、医療関係者は治療を実践なさいますが、それを社会的に「研究する」というのはどういうことだろう、と思いました。私、さきほどから瑞穂ちゃんの言葉がガンと響いていて、「中身はわかった。分析は終わった。で、それで？」といわれているような気がするんですよ。あなたにとって研究とは何でしょうか？

市野川 私が答えるんですか？

上野 はい。ああ良かった、司会者で。

市野川 また意地悪な質問が来るなあ。さきほど「分析」という言葉が出てきましたが、僕は分析ということはちゃんとやってなくて、強いてお前がやってることを挙げろと言われれば、「書き留める」ということです。どういうことかということ、誰も皆必死で生きてるから、忘れちゃう

わけですよ。身の回りで起こったことや、さらには自分自身がやってきたことを。だから、一つ研究者がやるべきことがあるとしたら、全部は書ききれないかも知れないけど、こういうことがあった、ああいうことがあった、ということをきちっと書き留めるということが一つ。それが研究するということだと思います。あともう一つは、「つなげて考える」ということだと思います。

上野 研究とは何をするのかとは聞いてないんです。あなたにとって研究ってなに？ と聞いているんです。

市野川 だから、私なりに答えているでしょう。他人の話を最後まで、ちゃんと聞きなさいよ。僕がやってきたのは医療について書き留めるということと、それから、もう一つ「つなげる」ということです。色々なことがつながると思うんです。べてるの話もそう。それは、さっきも言ったように、この東大の精神科とべてるがどうつながるのかということを考えなきゃいけない。でなければ、この東大で、べてるの方々をお呼びしてシンポジウムを開いたって、何の意味もないと私は思う。さらに、べてるの話を聞いているとすごくハッピーになりますが、一方で、日本で精神医療に関連していえば、ちょっと暗くなることも起こっているわけです、実は。例えば大阪の付属池田小学校の事件があって、被告の人がこないだすごいスピードで死刑になり、また事件の余波で「心神喪失者等医療観察法」というのができて、それが来年から施行される予定です。僕はこの法律については批判的だし反対だし、久しぶりにデモなんかも行きましたが、そういうこととべてるがどういう関係なのかを考える、というのが研究。分析はしなくてもいい。少なくとも、つなげて考えることの後に来る作業でしょう。

上野 うーん。ずれてるな。あなたにとって研究とは何を意味するかを聞いたかったんだけど。

ディスカッション

べてるに学ぶ

上野 これでひととおり、皆さんに発言していただきました。ここにおいでの方の顔とお名前、それからどういう発言をなさるかということがおわかりいただけたかと思います。さてわたしたちがここにいる理由ですけれども、今日のテーマは「べてるに学ぶ」です。市野川さんは先ほど「べてるのユニークさ」ということを指摘されました。ユニークとは、たった一つしかない、よそにないという意味ですよ。べてるがどうしてこんなに人気を得て、早坂さんだの、向谷地さんだのがひっぱりだこになって、全国各地で講演会がもたれて、東大へも来ていただいて、そして皆さんがこの会場に集まってらっしゃるかということ、皆、学びたいのです。学びたいというのは——べてるのようなところはべてるにしかない、と、思いたくない。べてるのようなところを、自分の足元や近くにも何とか作れないものかと考えるからこそ、学びに来ているのだと思います。べてるがどうしてできたかというと、さっき向谷地さんは、潔どんとの出会いだとおっしゃいました。それは偶然……なのでしょうか。潔どんのような人と、向谷地さんのような人が偶然の出会いをしないと、べてるは生まれないのでしょうか。

向谷地 そうした出会いというのは、誰にもある、どこにもある、そう思います。わたしは浦河で暮らすまでは、ずぼらな人間ではありますが、どちらかというと物事を白黒で考えるほうでした。高校生のときは生徒会で先生にあれこれ言ってみたり、時代の空気もあったのですが、そんなことが得意な、批判精神の旺盛な人間でした。それが潔さんたち



に出会ったときに、単純に批判していくことでは変えられない、批判の矛先が自分自身をえぐっていくという事態に直面しました。しかもわたしたちが社会の中で大切にしている、協調性だとか根気だとか、それでもって自分の生活を守っていかうとするような道徳的規準、そうしたものをことごとく壊していく。ある種の社会的なつながりを、結果的に壊していかざるをえないかたちでこの世に存在している人たち。やはり潔さんとのつきあいは、わたしにとっては非常に……。今、幻聴のように木林さんの声が……。わたしにも何か発言させろと言ってますね。

上野 木林さん、ここに席あけたから座って。

向谷地 期待されている専門家の役割を果たさせてくれない人として、潔さんだけではなく、いろいろな人たちとの出会いがありました。だからこそ逆に、一緒に暮らしてみようかなというふうに思って、足かけ3年、一緒に暮らしたんですけども、ひどい目に遭いました（笑）。

上野 木林さんがご登場になったから、木林さんにもぜひ参加してもらいましょう。べてるの生活について紹介してください。べてるに住んでいて、いいことは？

木林 共同住居に住んでいますが……、いいことはありませんね（笑）。わたしは1か月に1度、実家に帰っていて、共同住居で暮らしてるふりをしてるような感じです。べてるの住まいはいつ火事になってもおかしくないし、殴られたこともあるし、首をしめられたこともあるし。わたしも電話の台を壊したことがあります。ほかの人もそんなことをしていて、サバイバルをやっているみたい。でも最近は平和ですね。静かだし、皆、おだやかになって。外から情報が入ってくるからだと思いますけれど、べてるの。住みよくなっているから、うちに帰るのが面倒になって、自分の部屋にいるのが好きです。あとは憩いの間——茶の間で、皆で話してます。病気っていうけど、ほかの人のほうが病気じゃないのか、あいつらのほうが病気だとか。向谷地さんだっておかしいよねって、皆、言ってますよ。

伝達可能な知

上野 木林さんの目から見たら、向谷地さんと川村さんってどんなふうに見えますか。

木林 見かけは川村先生のほうがワイルドな感じですけど、実は向谷地さんのほうがワイルドで、川村先生は友だちのような感じ。向谷地さんは本当に何を考えてるのかわからない、あやしい人間です。

上野 実に的確にとらえてらっしゃる。べてるはユニークな場所で、向谷地さんもお自分のことを特異な人間だと思っておられたということです。川村さんもかなり突出したキャラクターの持ち主ですが、早坂さんとか向谷地さんとか川村さんとか、こういうユニークな人たちの結びつきがないと、べてるはできないのでしょうか。例えば川村先生……川村さんにしましょうか、川村さん以外の人では、べてるの医者は勤まりませんか。

川村 そんなことはまったくないと思います。キャラクターと言われますけれども、わたしよりキャラの濃い人はたくさんいるし、わたしぐらいでキャラを云々されなくてもいいかなと。わたし、けっこう科学的にやっているのです（笑）。何が最も効果的かということを考えています。それから医者という自分自身の役割、これはわたしだけではなくて、皆

同じだと思いますが、それぞれの役割をどう使うか、どう生かすかということ。さまざまな場面で、自分がどの位置に立つか、向こうへ出るか、ひっこんでいるかということは考えますけれども、医者が仕切っているんだというような、あるいは皆が医者顔色をみているというような、そういう状況は好みではないということはもちろんですが、自分のポジションの認識、自分自身のわきまえが大事かなと考えています。

上野 「科学的」という言葉に感動しました。まさか川村さんの口からこの言葉が出るとは……。

木林 わたしは川村先生に眠剤（睡眠導入剤）を処方してもらっていますが、このあいだ眠れなくて、2日分のんじゃった。2週間おきに外来に通いますが、今度るとき、川村先生に「どうして2日分のんだの」って訊かれたら、どう答えようかって考えて、「寝ぼけてたから」って言ったら、川村先生は笑って薬を出してくれるんじゃないかな。たぶんくれます。川村先生ってそういう医者さんです。

上野 患者さんのほうでも医者さんの扱いを心得ているということですね（笑）。今、川村さんのお使いになった「科学的」という言葉ですが、わたしはそれをこんなふうに定義しています——伝達可能な知、と。つまり他人に真似ができる、川村さんでなくてもできるということですね。べてるがそこらじゅうでこんなにもてもてという現状は、べてるのような場所がほしいという欲求のあらわれだけれど、それは同時にべてるのような場所がそこにはないという証明でもあります。川村さんにも向谷地さんにもほかの人にもお訊きしたいのですけれど、べてるのような場所が広がっていく条件とは何でしょう。裏返しに言いますと、それが広まらない理由を作っている抵抗勢力とはいったい何でしょうか。川村さんは、自分はわきまえをもってやっている、科学的にやっている、それがふつうのことのようにおっしゃる。でも川村さんにとって常識であろうと、ほかの医者にとって常識にならないことがあるのではないのでしょうか。それはどうしてなのかということ、やはりこの東京大学医学部鉄門講堂でお話ししていただきたい。

「わきまえ」と「畏れ」

川村 畏れというものはあると思います。わたしは20数年、浦河日赤に勤務して、医者の知恵としては一貫して転落してきたなと感じています。現在は、治療関係といいますか、医療従事者と当事者の関係性、それをどう変えていくかということ意識しているところです。わたしたちは必要以上にひきうけすぎたり、関わりすぎたりしているのではないか。そういう中でとても重苦しい、あるいは実りの少ない状況をうみ出してしまっているのではないか。浦河で様々なとり組みがあり、その結果として、べてるが皇居や国連や、東大にも行くことになったというお話をしましたけれども、治療という枠の中だけで考えていたら、こうしたことは決して起こりえなかったでしょう。治療という枠の中で言うならば、治療関係の中身を考えていくということが、とても大事なことだったなと思います。だから医者が仕切っては、やりすぎではいけないということです。最初わたしは、わたしが治せば——あまり治す力もないのに——いいことが始まるのだ、次々プラスのことが起きてくるのだという、実に単純なことを考えていましたが、わたしが見ることになった現実はそんな単純なものではなかった。わたしの力よりもむしろ、多くの人たちの力がそこに及んで、わたしたちが予想もしなかったことがたちあられる。「先生のおかげでよくなりました」と言って帰っていった患者さんは、誰一人結果がよくなかった。そのことがわたしには大変大きな意味をもっていました。医者のおかげというよりも、入院なり通院なりといった治療の場面にきて、今までなかった世界と向き合い、いろいろな人と関わったことで、いいことが起きてきたのです。よかったことの中身を患者さんたちに訊いていくと、医者のおかげというところがだんだんでてこなくなります。しばらくしてはっと気がついたように「先生にもお世話になりました」と（笑）。そのくらいの感じがとてもいいのです。特に皆さんは、「友だちがふえました」、「自分のことを自分の言葉で言えるようになりました」、「安心して自分のことを話せます」ということを口にします。そういう環境ですと、わたしのほうも医者の限界といいますか、たいした料理も出せないような自分のメニューをさらさなきやいけない。それはわたしにとって、はじめのころはとてもこわ

いことでした。今は皆の力を信じることができる。そのほうが結果がとてでもいい。居心地もいい。自分の役割の果たしどころとしてもいいな、という実感をもっています。

仲間の力

上野 もう自由な討論に入っていますから、どなたにどんなふうに割って入っていただいてもかまいません。川村さんは「わきまえ」そして「畏れ」という言葉をお使いになりました。そうすると川村さんのようではないお医者さんたちというのは、「わきまえ」のない、「畏れ」のない医療関係者ということになるんですが、そういう方たちに「わきまえ」と「畏れ」をもってもらうためには、どうすればいいんでしょう。お知恵はありますか。川村さんや向谷地さんを育てたのは、木林さんたちなのかしら。

早坂 いや、俺だよ。

上野 待ってました、潔どん。向谷地さんが先ほど、潔どんという、どうしても治してもらおうとしない、抵抗する患者に出会ったことが自分を変えた、患者の力が自分を変えたんだとおっしゃったけど、潔どん、どう思いますか。

早坂 いや、患者の力だけではないと思う。もし患者の力だとしたら、日赤病院の患者さん——患者さんというより、日赤の仲間と言っていいくらいだけど、それからべてるの仲間、そういうパワーが向谷地さんなり、川村先生なりの味方をしたというか、いいところを見ぬいて、川村先生がよく言う、おいしいところをもっていって熟させたというかね（笑）。

上野 潔どん、今日は大サービスだね。川村さんをえらいもちあげてるじゃない。

早坂 今日は東大に来たら、何だかわけのわからない〈電波〉がいっぱい入ってくるもんだから、もう〈お客さん〉だらけでゆるくない（つらい）んだわ。前の列はきれいな子がいるし、もうパラダイスだ（笑）。

上野 だんだんわかってきました。一人や二人の力ではなくて、仲間の力だと。

早坂 先生の真似して、医療の立場から言うと、当時——20年前は、先生が仕事して生活していく中には精神科の仲間がいて、それで成り立っていたっていうところがあった。今はべてるも含めた仲間に支えられている。べてるはそれだけの組織になった。今日は僕は東大に来て、東大生の前で発言してる。東大の頭でどのぐらいべてるに近づいてくるか、これは問題だ。僕は中学校の特殊学級上がり、そして話を聞いている皆が東大生っていうのは珍しいもので、こんな席に僕が上がってるというのは奇跡だよ。20年前にはこんなこと考えたいことないもの。べてるにはこんな力があると、……またゆっくり話したいと思います（笑）。

上野 仲間の力というお話がでましたけど、河崎君、瑞穂ちゃん、どうですか。仲間の力というものをどんなふうに感じますか。そういう仲間の力を作ってきたのは、河崎君や瑞穂ちゃんですよ。

河崎 僕は爆発系で、これはべてるでは有名なエピソードですが、爆発救援隊というチームを作ったんですよ。でも爆発していちばん救援されるのは誰かという、僕なんですよ。爆発するっていうのは、助けてほしいって、仲間に自分の気持ちを伝えられなくてそうなるんですね。そんな中で周りの人たちが「今のままでもいいんだよ」とか、「爆発してるけどお前いい奴だ」とか、そうしたことを言ってくれて、それでだんだん素直に自分の気持ちを話せるようになったということがあります。そんなふうにして僕は仲間に助けられました。

上野 瑞穂ちゃんはどうかな。瑞穂ちゃんが誰かに対して、仲間になってあげるというようなことはあるのかしら。

渡辺 その〈あげる〉ですけど、わたしは〈してあげる〉といった言葉なり、考え方なりが、ものすごく嫌いで、拒否反応が出るくらいなんです。仲間というのは、義務感とか必要性とかはないわけなんですよ。そこが仲間のよさでもある。仲間を助けてあげなくちゃいけないわけでもなんでもなくて、だけど浦河の人たちは、べてるのメンバーに限らず、何もしないことも含めて、自分の気持ちとして何かをしてくれる——うまく言えませんが、それは決して押しつけではないんです。一般の社会で何かを〈してあげる〉とか、治療をするとかになると、その受け手のほうは、してくれる気持ちをもってくれたことを感謝しなければいけなかったり、被治療者としても何か義務が生じたり、そういう要素が絶

対にあると感じます。わたしの場合、親子関係の中でもそういうふうに感じていました。浦河の中で、そういう要素がまったくないと言ったらうそになりますが、ほかのところと比べて、何かをしてあげるという気持が、ずっとずっと純粋なもののような気がします。してあげたから云々という見返りを求める気持ではなくて、そのときに自然に発生した気持としてそれを伝えるということが、とても大事にされている場所というか。気持を相手からとどけてもらったとき、すぐに答えられるかどうかということは、調子がわるいときであればあまり問題にされないし、何かをしてもらったときに、応えなければいけないという義務がほかのところよりもとても少ない。何かをしてもらったとき、何かを返さなければと、わたしなどはまっさきにそれを考えてしまいます。そして考えた末に結局できないというパターンが続いているんですが、それでも浦河では、何とか居場所をみつけれられる。気持をとどけてもらえることで、どういう応え方をするか、自分で選ぶことができるというところを含めて、何だかほっとしています。

早坂 渡辺さんが言うのは、付け加えると、側にいる——側にいるだけで安心するということです。それから場の力。瑞穂ちゃんが言う、言わなくても何か感じるというのは、気持が皆一つなんですよね。僕は今ぐらゐの季節になるといつも病気になるというか、〈固まる〉んです。1年間のうち2回くらい入院します。僕の住んでいる共同住居、グループホームべてるには9人いるんですけど、僕、今年の7月にもサービス旺盛で病気になって日赤に入院して、気がついたら保護室にいたんですけど、そのときべてるの仲間がどういうことをしたかっていうと、何もしなかったです。ただ見ているだけで、最後はやはり仲間や浜田牧師とかが病院に連れてってくれた。病気の中で何が起きているのか、自分自身がわからない。見えないものが見えたり、体が震えたり、ごはんも食べられなくなる、歩けなくなる、眠れなくなる。僕らの病気は、まず眠れなくなることから始まります。そのときに発作を起こしたり、心が不安でどうにもならない人もいっぱいいるけども、でも浦河の場合は入院しないですむんですよ、一部の仲間はね。僕は入院しないとどうにもならないときもありますが。僕は病気になったときに誰にも相談しないんです。気がついたら保護室の中にいるわけです。それをくり返していく中

で僕が何をつかんだかという、〈がんばらない〉ということ。

上野 今の瑞穂ちゃんや潔どんの話を聞いて、そうした仲間や傍に
いる人や場とかいうものが、考えてみたら自分の周りにあるのかなあと、
側々とした思いになっておられる方もたくさんいらっしゃるかと思いま
す。今の話を聞いていた田口ランディさん、「してあげたい」病のあなた
は、どんなふうに思われたでしょう。

田口 べてるの方たちに会うと、いつもわたしはアドバイスをもらったり、
助けられてばかりいます。このあいだもシンポジウムがあつて、わ
たしが父親の話をして悲しい気持になっていたら、あるべてるの方がい
らして、「もうそのお父さんはしょうがないよ、だめだね。そんなこと考
えなくていいよ」と、わざわざ言いに来てくれました。わたしは常に〈し
てあげたい〉という意識からぬけられなくて、べてるの人たちに何度
会っても、何かしてあげたいと思ってしまうのに、ふしぎなことに結局
何かしてもらっています。わたしが初めて潔さんに会ったとき、潔さん
はすごいセクハラ発言をして、いやだなあと思ったんだけど、そのとき
はこれはべてるの潔さんだつてわかっていたから、わたしはにこにこし
ていい格好をしてしまいました。でもあとになって、ああいうとき、ど
うしてわたしは正直に「いやだ」と言えないのかな、と。べてるという
ものに一線をひいて、予定調和的に、ここはべてるなんだから、潔さん
はこういう人なんだから、わたしのほうがそれに合わせなくてはと、そ
う考えていた自分自身に嫌悪感をおぼえました。次に会ったときは、潔
さんがいることがわかっていましたけど、どうせ潔さんはわたしのこと
も覚えてないだろうし、すこし距離をおいていよう、なんて思っていた
ら、潔さんのほうがわたしを見つけて、「おおランディ」と声をかけてく
れました。どうしてわたしはいつもぐじゃぐじゃしていて、彼みたいに
ストレートになれないのかなあと、毎回考えこんでいるので、何だか発
病してきそうです……（笑）。

上野 潔さん、覚えてます？ わたしも、あなたをセクハラおやじだと思
うけど。

早坂 それは認めるんだけど。ぐじゃぐじゃしたランディさんもあるが
まま、ストレートに出せば楽なのになあと。でも出せない自分がいるっ
てことだな。これは今度診察するわ（笑）。

田口 今回のシンポジウムは「べてるに学ぶ——《おりていく》生き方」というテーマですけれども、昨日からわたしは自分に問いかけています、「おい、お前は本当におりたいか？ おりたいか？」と。ずっと考えていましたが、わたしは実はあまりおりたくない（笑）。そんなわたしがここにいてかまわないのでしょうか。

上野 何から「おりたく」ないのですか。

田口 ……「《おりていく》生き方」——そのニュアンスがもういやなんです。

早坂 そうだね、だいたい顔にそう書いてあるよ。大丈夫、だんだん染まってくるから、「《おりていく》生き方」に（笑）。

現実と事実のもつ意味

上野 こんなふうにお聞きしていると、仲間の力というものは、ああ、あそこにはあるが、ここにはないなあという気分になってしまう人もいるのではないのでしょうか。仲間というものは自然発生的にできるわけではなくて、やはり種も仕掛けも……あるんですよね。向谷地さんのようなキーパーソンがいなくて、こういう仲間づくり、場づくりはできるのだろうか、とたくさんの人が思ってしまうかもしれません。向谷地さんはお名前も「生（いく）良（よし）」とおっしゃって、「良く生きる」って意味ですね。お父様がクリスチャンだったのかなあと、同じクリスチャンのおやじをもったわたしは想像しました。それに「べてる」というのは神の家という意味だそうですし、やはりこういうことはキリスト教徒だから思いつくんだ、そうでなければこういうことはできないよね、などと勘ぐってしまいます。どうして向谷地さんにできて、ほかの人にできないのでしょうか。

向谷地 生良という名前をつけてくれたのは、実はおじさんでして、今思えばおじさんは分裂病でしたね。何を根拠につけたのか……、きっとおじさんは幻覚妄想状態の中で命名してくれたのかな。ですからわたしがこうした道に進んだのも、運命づけられたものでしょう（笑）。先ほど川村先生は、実は意外にわたしたち科学的なんだよということを言いましたけれど、わたしも意外にこう見えてもそれに近いんですよ（笑）。わ

わたしは事実というものに忠実なのです。最初浦河におりたとき、自分はこんな町で暮らすんだっけと、都落ちのような、ちょっとさびしい感じがわいてきたという話をしましたが、そうなるわたし自身の課題としては、わたしの自立、わたしの社会復帰ということになりました。つまり、400人の職員の中でたった一人のワーカーとして、自分の相談室、相談業務、ワーカーの仕事をつくりあげていく、その孤軍奮闘、それは失敗の連続だったわけだし、結果的には精神科の病棟から5年間追い出されてしまうという経験もしました。その過程こそ、わたし自身の自立の歩みであり、社会復帰というテーマの実現だった。そういう自分が抱えている現実というものと、わたしの目の前にいわゆるクライアントというか、相談者というかたちでいる潔さんたちの現実というものを、等しい事実として大切に感じるという、ただそれだけの話です。そこを、わたしは専門家であるから、わたしが抱えている現実はこちらにおきながら、相談者としての役割を演じ続けるというような、そういう器用さというものが、わたしにはなかったというだけです。わたしが抱えてる現実、皆さんもそれぞれいろいろな現実を抱えてて、その現実と現実をきちっと出しあって、お互いこれから一緒にタッグ組んでやっていくかという、そういう意味では決してユニークではない、ふつうのこと、当たり前のこと。そうしたとり組みは、当事者と専門家の関係性からして不適切であるという批判によって、わたしは専門家の中から省かれた経験もあるのですが、しかし今だんだん、そうしたやり方のほうが主流になってきています。いい時代になってきたのだという感じもあります。事実、現実の抱えている意味に忠実になると言ったらいいのでしょうか、例えば潔さんが発作を起こして入院すればするほど、べてるの昆布は売れるという現実がある。潔さんが入院したということを失敗とか悲劇として扱うよりも、潔さんのおかげで今年も昆布を売りあげたなという現実、事実のもつ意味を大切にする。そういう現実には皆さんどこでも抱えていることですから、あちらでもこちらでも潔さんの、木林さんのようなキャラクターにたくさん出会いますし、必ずしもそれはべてるの昆布という必要もない。そういう今を楽しむ楽しみ方は、どこでも実現できるのではないのでしょうか。

人を尊重する

上野 こうして関係者にお話を聞きますと、皆さんたいいてい、ふつうのこと、当たり前、ただそれだけとおっしゃるんですね。ではどうして、ふつうのことがふつうにならないのだろうか。向谷地さんのような人がいないわたしたちのところでは、どうしたらいいのだろうと思ってしまいがちです。一般に、ソーシャルワーカーさんたちは、中間的で難しい立場におられると思います。医者と患者さんのあいだの中間管理職みたいな立場でしょう。ふつうのことがふつうにならないことについては、ソーシャルワーカーの立場から、言いたいことがどっさりあるのではないのでしょうか。伊藤さん、いかがですか。べてるのやり方が、もしべてるだけに特別なことで、よそに広がっていかないとしたら、一体何が障害になっているとお考えでしょうか。

伊藤 失礼な発言になってしまうかもしれないのですが、ドクターのプライドとつきあうのは大変です……。いったい何のために仕事をしているのか、どうしてそんなにもプライドを一生懸命に守らなくてはいけないのかと、しばしば思われました。全国のソーシャルワーカーたちが集まって悩みを相談し合うと、必ずでてくるのは、医者のプライドをどうもちあげて、お医者さんのご機嫌をとりながら、お医者さんが不機嫌にならないように、患者さんにとっていい方向にもっていくかということです。ワーカーたちは、そのあたりに莫大なエネルギーと時間を費やしています。

上野 出ましたねえ。これが聞きたかった。ホステスと同じ悩みだ。すべての女性が男性に感じている悩みです。となるとドクターというのは、やはり「のぼった」人たちなんですねえ。

伊藤 先生と呼ばれる人たちは、できないことをできないと言ってはだめだし、弱いところを出してはいけないし、そこを力で押さえつけなくてはという、わたしにとってもたいへんな時期がありました。浦河のいいところは、すぐにソーシャルワーカーを活用してくれるところです。やりがいもあるし、関係者がチームを組んで、それぞれの立場から、当事者も含めて全員で解決策をさがしていくことができる。そんなふうに力を合わせられるという点が、浦河の自慢できるところではないかなと

思います。その当たり前のことができないというのは、仕切屋がでてきてしまったり……、ドクターたちが傷つきやすいということなのでしょうが……。

川村 わたしが初めて浦河に行ったとき、向谷地君がいて、わたしの上の先生がいて、その関係がなかなか厳しい状態でした。向谷地さんは配慮のできない人なんですね（笑）、わたしから見ても。もうすこし上手にやりなさいなどと指導はしていたのですが、あとでわかってみたら、わたしも上の先生から嫌われておりまして、全然だめでした。ふり返って考えるに、よけいなこと——気遣いするということにそれほどエネルギーを使っていない、少なくともそうはみえない環境で医者として勤務したということが、わたしにとって最高の鍛錬になったのだという気がしています。向谷地君がわたしのところに患者さんを連れてくるやり方にも、わたしはプロ意識を感じていました。人間から出るあらゆる汚れがこびりついたような人を、わたしのところに初めて患者さんとして連れてくるとき、彼は「先生、宝の山のような人を見つけてきました」と言うんですね。その言葉に、わたしはわたしの役割を発揮しなくてはいけないという自覚をもたされました。配慮はしないけれど、働かせるのはうまいんです。今、向谷地君の後輩である伊藤さんを初めとして、若いワーカーたちが続々と力を発揮しています。「向谷地さんのような」とはよく言われることですが、皆どんどん彼から吸収して、それはメンバーにどんどん伝わっていつています。皆すばらしいセンスをしています。力を見せてあげれば、そこから学んでいく人たちはたくさんいる。向谷地君なり、1人2人のことが強調されやすいけれど、目立ちますから仕方のないことではありますが、実際のところそれでは正確ではないなとわたしたちは思います。

上野 周りにいる人がドクターに気遣いや配慮をしないほうが医者が育つ、みたいなお話ですけど、それは事実なのでしょうか。

伊藤 ずっと配慮され続けてきた不幸というものがあるのかもしれませんが。向谷地さんでなければできないのかというお話でしたが、配慮のなさというのは、べてるのいちばんの、とても大きな特徴です。誰に対してもそうなんです。社会福祉施設にしても病院にしても、配慮のしすぎ、援助のしすぎ、お節介ということが、本当にたくさんあると感じます。

『べてるの家の「非」援助論——そのままでいいと思えるための25章』(医学書院 2002年)という本をべてるが著していますが、そこで援助しない援助の大切さ、それがいかに大事かということを述べています。本人の力を信じること——本人が自分の力で見つけていける、そのことを信じられるという、人を尊重する当たり前の姿勢をもっているかどうか。そこが、向谷地さんやべてるにはあったのかなという感じはします。

上野 人を人として尊重する、そういうふつうのこと、当たり前のことがなかなか広がらない抵抗勢力は何でしょう。壁があるとしたら、その壁は何なのか、どうしたら越えられるのか。市野川さん、どうですか。

市野川 現場においで伊藤さんたちの感覚が、たぶん正しい感覚だと思いますが、さかのぼって歴史的経緯を見てみると、皆さんの「べてる」の発祥でもある「ベーテル Bethel」というのはドイツの町で、そこはいろいろな障害をもつ人が、さまざまな支援を受けながら暮らす共同体ですが、ドイツで精神医療を改善しようという運動があった1970年代のころ、日本でも同様の動きがありました。どこが違ったのだろうかということを考えてみますと、日本にはどうも、いいことをやろうとするお医者さんがどんどん孤立していくような風土があるらしい。間接的にしか知りませんが、努力を重ねていた医師が自殺してしまったり、いろいろなことがあったようです。ドイツでのさまざまな変革の動きをみていきますと、医師たちのネットワーク、協力体制というものが非常にしっかりしています。あるところでの取り組み、あるところでの実験が、うまくいきそうだとすると、ただちに別のところでも採用するという、そういう連携がとても密で、新しいことを試そうとするお医者さんが〈ういてしまう〉という現象は、ことによったら日本に特異なのではないかと思えます。「ユニーク」という言葉は半分マイナスの意味もあるのですが、べてるだけがこうした道を進むというだけではなくて、べてるとほかのところ「つながって」進んでいけないものでしょうか。お医者さんの悪口も出ましたけれども、率直に言いますと、医師たちの間のネットワークがないかぎり、べてるのような手法も広がってはいかないのではないかと僕には思えます。ではなぜそのネットワークができないのかということになりますと、そこはまだよくわからない。

ところで、さっきから上野さんは他人に尋ねてばかりだけど、上野

さん自身は、どういう流れでべてるに魅惑されて、シンポジウムの開催にまでこぎつけたのか、司会の任を一時、解いてあげますから、ちょっとそのいきさつを教えていただきたい。

上野 何でもないことです。出会いですね。誘われて浦河に出かけたんですね。そうしたら、驚きました、わたしの現実そのままだと思ったんです。知らない世界とか異質な世界とか、そんなふうにはまったく思いませんでした。べてるでは、自分の現実のありのままを、そこに見せてもらうような気がします。統合失調症の患者さんとはどんな人たちなんだろうと思って、河崎君と話したときに、わたしは3分間でわかりました、この人は嘘とごまかしのきかない人だと。嘘とごまかしで過ごしているのがわたしたちの世界だけれど、べてるは自分の生きている真実をそのまま見せてもらえるような場所だから、ものすごく親しみを感じました。

万能感と無能感の闘い

向谷地 伝達可能な知が科学であるという定義でしたが、河崎君たちが自分たちの経験からつむぎ出してきた暮らし方、生き方の知というものが、それらは博士号をもっているような人たちが主としてわたしたちに提示しているもの以上に、当事者同士で伝達可能な知として急速に普及しています。職業としての研究者の知と、当事者の知が、ユニークというだけではなく、きちんとつながったかたちで最近議論され始めているということはとても面白い。河崎君は最近やや爆発気味で、沸騰しています。この前もどこかのシンポジウムの最中に爆発しかけましたが、わたしとの電話でもこのところよく「僕はついに東大まで行くのか、僕はそんな人間じゃない!」とか、「研究者という人たちの顔を見るとむかむかしてくる」とか言っています。わたしはわくわくしてるんです、河崎君が爆発しそうだ、これはおもしろいぞと。河崎君の最近の爆発は、万能感と無能感の闘いということで紹介してもらったらわかり易いかもしれません。

河崎 僕の症状というのは、過去の自分と今の自分ていうのがいまして、過去の自分がささやいてくるんですよ。お前は東大に行くんだ、東大生



と同じくらい偉いんだ、東大生と同じことができるんだとか、東大生とめし喰っても、ため口きいてもいいんだって、そういうことを自分でも考えてしまうんですね。そうすると、知的なインスピレーションがわいてきて、俺って何でもわかる、こんなことも考えられる、わかるわかるって夢中になっていく。それが万能感に操られている状態で、その舞い上がり型の〈お客さん〉がきている状態でべてるに行って、人の中に入ったりすると、ほかの人と話ができないんです。自分が偉くなってしまうから、周りの人がだめに見えるんですね。でも周りの人がだめだと思うと、だんだん自分のこともだめだと思い始める。人と話ができない、俺ってだめだ、孤独だしさびしい、そして爆発してしまう。ますますだめだ、と、そんなふうに今度は無能感が——突き落とし型の〈お客さん〉がくるんですよ。自分の価値観というものが〈お客さん〉の影響でころころと変わってしまう。

向谷地 これが「万能舞い上がり型のお客さん vs 無能突き落とし型のお客さん」という、河崎君の最近の爆発の構造で、彼は自分の立つ位置に苦勞しています。苦勞のまっただ中です。もしかしたら東大にも来られ

ないかもしれないかった。

河崎 東大に行く前に、入院してた地元の病院からべてるに出かけることになっていましたが、その前日に発作が起きて、また爆発して入院してしまったんです。そしたら向谷地さんから連絡ががきて、「いいセンスしてるよ、そのがつくりした首の垂れ方がなかなか格好いいじゃないか」と言われました……。何の話をしてるんだかわからなくなった(笑)。

上野 当事者研究をわずか数分で、ここまで内容濃く紹介してくださってありがとうございます。そろそろ時間が残り少なくなってきましたが、言い残していることはございませんか。

田口 抵抗勢力とは何かというお話がありましたが、自分の体験をもとにして言いますと、抵抗勢力の非常に大きな部分というのは、自分だった——ようするに当事者の家族が、抵抗勢力になっているのではないかと思います。わたしは、自分が家族という立場でなければ、もうすこしニュートラルな感じで「《おりていく》生き方」ということを受容できたのでしょうが、自分の家族の中に、自分にたいへん迷惑をかけ続けてきた人たちがいるという経験があると、そうはなりたくないという気持ちもあり、それにまた家族であるがゆえに、相手をありのままに受け入れることができない状況というものがあります。その部分をどうしたらいいのかわからないのだけれど、わたしは今、早坂さんたちの〈仲間の力〉を貸してもらって、そのあたりをのりこえようとしてるところです。ともかく家族の問題というのは、べてるのようなものが広まっていく上で、大きな抵抗勢力になってしまっていると感じます。

「ほどよい正常」と「ほどよい異常」

上野 別の言い方をすると、家族も家族当事者という当事者だということですね。先ほど当事者研究の見事な例を示してくださって、研究者と聞くとむかむかするという河崎君に対して、向谷地さんが当事者研究と研究者がつながっていけば、という提案をしてくださいました。ここで一言言わせてください。わたしがやってきた女性学というのは、あれは今から考えてみれば当事者研究でした。わたしたちは、20年も前から当事者研究をやってきました。ところで、会場からどなたか、発言した

い方いらっしゃいますか。

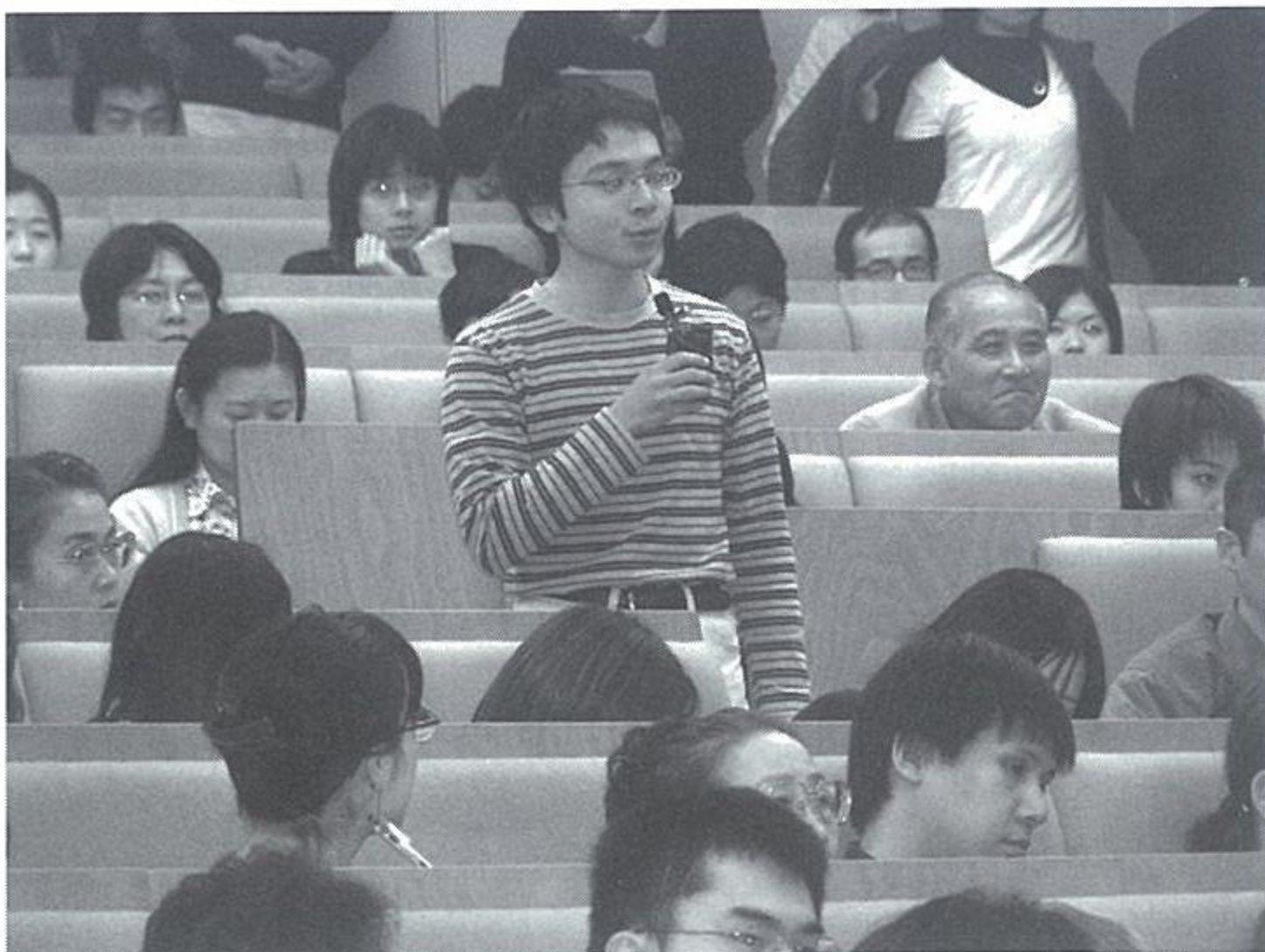
フロアより 今日のお話をおうかがいして、人間というのは、ほどよい正常とほどよい異常というものが併存して、初めてクリエイティブな活動をするのではないかと思いました。正常なだけでは創造性がなくなり、逆に異常なだけだと今度は疾病になってしまう。ある程度の異常さというものが、心の創造のきっかけとなり、人間の無限の可能性をひき出していくのではないのでしょうか。日本語に「物狂い」という言葉がありますが、芸術活動でも、何か物事を理解するのにも、やはりこだわるといえますか、ある程度のアブノーマルさというものがないとだめなのではないかと、わたしは思うのですが、どうでしょうか。主として川村先生のお考えをうかがいたいと思います。

川村 わたしの担当の患者さんたちが、お互いにそれぞれの状態を話し合うとき、「前よりはずいぶんよくなったね」という言い方をしたことがあって、そう言われた患者さんが、別の人から「病気がよくなったの？」と訊かれて、「いや、川村先生にかかっているから病気は変わらない」と(笑)。つまり病気はある、でもよくなっているという、そういうやりとりがわたしはとても好きでして。医者目から見れば症状はある。しかし健康感といえますか、健常者以上に健常に感じる、そう伝わってくるものがあるという、そういう変化です。健康を育てるようなイメージが、べてるにはあるのではないのでしょうか。問題と病気と症状が出会ったとき、それをどううけとめるか、それらとどうつきあうか、そこで何を発するか、そのあたりのことはべてるではたいへん尊重されています。問題と出会ったときに、どう向きあってどう反応するのかということは、たいへん重要なことです。

「《おりていく》生き方」とは

フロアより 「《おりていく》生き方」という今回のテーマなのですが、単純なことです。《おりていく》とはどういうことでしょうか。個人的には《おりていく》というよりも、還っていくというような印象をもっています。

早坂 僕たちは皆、高くなろう高くなろうとがんばってばかりで、「《お



りていく》生き方」を忘れていると思います。《おりていく》と言われると、なぜだ、上がったらいいいじゃないかと考えるかもしれませんが、上がるということは危険なことですよ。《おりていく》と、すごく楽なんです。川村先生がよく言う「右下がりの生き方」って、僕は最初わからなかったけど、《おりていく》っていうのは——飾らない、正直になる、それが僕の「《おりていく》生き方」かな。これがべてるの「《おりていく》生き方」の第1章。続きは『「非」援助論』を読んでください（笑）。

いいかげんに信じる

フロアより お話の中で「支え合い」ですとか「人を信じる」とか、あと「仲間とは」という言葉がたくさん出てきて、皆さんのあいだでは信頼関係がとても強いんだなと感じました。べてるの趣旨として、社会通念の枠にはまった考え方や、ふるまいを否定していくところがあると思いますが、そうすると相手が何をするかわからないということにはならないでしょうか。社会通念にはまった言動には、相手が何をしてくるか、ある程度は予測できるという効果があると思います。それがなくて、相手が何をするかわからないという状況で、相手を信頼するというのは、

かなり難しいことではないでしょうか。伊藤さんのご発言で、人を人として尊重するというのはとても基本的な、当たり前のことだというお話がありました。確かにそれはそうだと思います。でもやはり難しくありませんか、何の保証もないところで相手をそのまま信頼するというのは。べてるのそういう信頼関係というものは、意識的につくってきたものなのか、それとも人に対する見方というものをどこかで転換したら、ものすごく簡単なことになるのか、自然にできることになるのか。それをおうかがいしたいです。

向谷地 皆さんの「信じる」「尊重する」とすこし違うのは、わたしたちはあまりそれをきまじめに使ってないということですね。「信じる」「尊重する」というとき大切なのは、もうやけくそに——やけくそで信じるとか、やけくそで尊重するとか、いいかげんに尊重する、いいかげんに信じる、口先だけで信じる、口先だけで尊重する、そうしてしまうことです。皆さんは「信頼」「尊重」というと、何か美しい物語のように思いこんでいるかもしれませんが、その美しい物語が目の前にたちあらわれる前に、勝手に信じてしまう。渡辺さんの話にあったように、「渡辺さん、わるいけど、もうこっちは勝手に信じちゃってるからね」と、信じることを先取りしてしまう。言ってしまうえば勝ちと、そういうラフな感覚で、わたしたちは信じていますし、尊重しています。実際のところ、そのほうがいいのではないか。誰のポケットにでも入っていて、ハイとすぐにわたせるくらいのほうが。あまり美しい物語にしないというのが、浦河の伝統なんですね。ぜひ試してみてください（笑）。

エンディング

上野 いいかげんに信じる、口先だけで信じる、ほんのちょっぴりだけ信じる、信じてしまう。またまた名言です。べてるだけがユニークなのではない、あなたにも「べてるする」ことはできると、そう言っていただけのような思いです。それでは木林さん、ここはやはり、あなたにエンディングを締めてもらいましょう。

木林 べてるは病気を売る商売をしています。そういう会社です。昆布の作業もして昆布も売っています。わたしの理想としては、共産主義と

資本主義の中道をいきたいです (笑)。昆布を丁寧に作って、大事にたべてもらって、生産も高い、そんなふうであってほしい、そういう気持ちで昨日も残業して昆布の作業をしました。今回昆布は持ってきませんでしたが、ネットでも注文できるし、浦河に来たらお土産に買ってください。では「戦争を知らない子供たち」の替歌で「べてるを知らない大人たち」を歌います。

病気がうまれてべてるはできた 時給70円でべてるは始まった
あれから20年たって べてるはこんなに大きくなりました
ぼくらの名前を覚えてほしい べてるを知らない大人たちへ
目つきがわるいと許されないなら 体がくさいと許されないなら
今のわたしに残っているのは 涙をこらえて歌うことだけさ
ぼくらの名前を覚えてほしい べてるを知らない大人たちへ



シンポジウム報告論集

べてるに学ぶ-《おりていく》生き方

発行日

2005 年 10 月 31 日

発行者

東京大学大学院人文社会系研究科 21 世紀 COE プログラム
「生命の文化・価値をめぐる〈死生学〉の構築」
Construction of Death and Life Studies concerning Culture and Value of Life

発行所

東京大学大学院人文社会系研究科
東京都文京区本郷 7-3-1 Tel. 03-5841-3736

制作所

株式会社 三元社

印刷所

モリモト印刷 株式会社

製本所

株式会社 越後堂製本

日本音楽著作権協会（出）許諾第 0513938-501



